5 月第 3 週の礼拝　説教

■日　時：2022 年 5 月 15 日（日）

■場　所：立川教会

■説教題：「恵みと真理とに満ちて」

■聖　書：ヨハネによる福音書 第 1 章 14 節－18 節

　本日は、私自身を牧師として立たせてくれ、この何十年かにわたって導き支え続けてくれた出会いや聖書のみ言葉との出会いについてお話ししたいと思います。そのため、5 月 1 日の礼拝でお話ししましたヨハネによる福音書 1 章 1～5 節を思い出していただきながら、ヨハネによる福音書の主題が語られているとも言える 1 章 1 節から 18 節をひとまとまりとして、ご一緒に考えてまいりたいと思います。

ヨハネによる福音書の主題は、1 節の「**言は神であった**」14 節の「**言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。**」18 節の「**父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである**」という三段論法によって明確にされていると言われています。つまり、「言＝神」「言＝イエス」よって「イエス＝神」という三段論法です。そのこともあって、ヨハネによる福音書の 1 章 1 節から 5 節を最初に確認しておきましょう。「**1 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。2 この言は、初めに神と共にあった。3 万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。4 言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。5 光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。**」とあります。ヨハネによる福音書のなかで、この箇所は、神である言（ロゴス）を格調高くほめたたえる第一の讃歌として位置づけられています。ここでは、旧約聖書の天地創造物語を背景に、新しい天地創造を語り、ヨハネによる福音書の重要な概念である「**言**」「**命**」「**光**」とそれらに対立する概念である「**闇**」が提示されている、と言われています。そして、9 節から 12 節「**9 その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。10 言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。12 しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。**」は、最小のイエス伝と言われる部分で、ヨハネによる福音書の 2 章から 20 章において展開していく主イエスの到来と、主イエスの同胞であるユダヤ人たちによる主イエスの拒否と受難とが非常に簡潔に語られています。しかし、この箇所も、第二の讃歌として位置づけられることがあるように、「世に降った言」をやはり格調高くほめたたえていることに変わりはありません。

それらに比較して、本日の聖書箇所、ヨハネによる福音書1章14節の書き出しはどうでしょうか。「**言は肉となって**」とあり、「言は人間となって」とは書かれていません。元の言葉でも「肉」と「人間」は異なる用語です。聖書では、人間のことが軽蔑され卑しめられて語られる時には、肉と呼ばれていると言われています。そして、ヨハネによる福音書1章14節を、「神の子である主イエスはまさに多くのみじめさにひたされている肉体をまとうまでに、その身を卑しいものとされた。」と語られていると解説している方もおられます。それは、私たち人間が苦しみ悲しみにもだえている時に、主なる神がその様子を高みから御覧になって他人事のように励まされるということでは断じてない、ということを示しているとも考えられます。

私が今も印象深く覚えているのは、ある先生の最終講義の中で語られたというエピソードです。私自身はその最終講義を直接お聴きできなかったのですが、友人からその内容を聞きました。その先生は、「私は他の先生のように立派なお話はできませんが、私自身が経験したことを最後に語ります」のような前置きをして語り出されたそうです。それは、先生が持病の心臓病で何度目かに倒れ、いつものように救急車で病院に運ばれて集中治療室で過ごしていたときのことだそうです。意識が戻り、体中に様々なチューブが挿入され機械に繋がれて全く身動きもできない苦しい状況のなかに置かれていることを知り、今度こそは助からないだろうな、という思いが去来したときに、そのベッドの真下に十字架のキリストがおられて先生を支えていてくださっていることの確かさを実感なさったというのです。私はかつてその先生のゼミで、このヨハネによる福音書1章14節の御言葉「**言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。**」ということを主題に取り上げているカール・バルトの『教会教義学』のある箇所の講義を受けたことがありました。私がレポートにまとめなければならない対象箇所は、「**言は肉となって**」の中の「**なって**（ドイツ語ではWerden）」でした。この学びを苦労しながら続けることで、私は確かに「まことの神であり、まことの人間である」主イエス・キリストに出会いました。そして、その後の私自身が形づくられたのだと思っています。今でも、何か困難なことが起こったときや心が動揺した時には、この聖書箇所に立ち帰ることにしています。そのときの講義の内容と先生ご自身が味合われた「その身に私たちすべての苦しみ悲しみを引き受けてくださった十字架の主イエス・キリストの臨在の体験」とが、初代教会の信仰告白と言われているフィリピの信徒への手紙2章6～8節の「**6 キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、7 かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、8 へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。**」とも重なります。

次に、「**わたしたちの間に宿られた。**」「**わたしたちはその栄光を見た**」と「**わたしたち**」という言葉が重ねられています。その「**わたしたち**」は 12 節にある「**自分**（すなわち言であるイエス・キリストのことですが）を受け入れた人、その名を信じる人々」と読むことができます。主イエス・キリストが肉となって私たちの間に宿られても、それをそのように受け入れ信じなければ、主イエスと私たちは全くの無関係です。だからこそ、14 節は、ヨハネによる福音書で最初に讃歌という形で声高らかに打ち出された主イエス・キリストに対しての私たちの信仰告白であるとも言われているのです。そのことをしっかり覚えておきたいものです。そして、受肉された主イエスをわかりやすく表しているのが、14 節後半にある「**恵みと真理**」です。聖書で語られる「**恵み**」とは、つねに人間の側の状況などによらない神から一方的に与えられる愛、言い換えれば「先行の恵み」ということです。また、「**真理**」もこの世の正しさや偽りといった相対的な次元で比較されるようなものではありません。ヨハネによる福音書の 8 章 32 節に、**「あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする」**とあります。けれども、私たち人間は漠然とした自由を与えられるとめまいがしたり道に迷ったりする存在であることは、私たち自身のこれまでの歩みの中で多くの方が経験されてきたことでしょう。そのようなとき、「真理とは、私たちを深いところで捉え、神様に向かって自由に歩み続けることができるようにしてくださるもの」と考えることができれば、私たちは行く先がはっきり示されるので安心してそこに身を委ねることができるのです。ヨハネによる福音書の著者は、そのようにして独り子なる主イエス･キリストが受肉され、私たちと同じところに来られたということに「まことの神でありまことの人間」としての主イエス・キリストを見ました。だからこそ、さらに今度は主イエスの「**恵みと真理**」を受けた者として深い心の底から声高らかに歌が湧き上がって来たのです。そのことが、16 節が第三の讃歌と言われるゆえんだと思います。

そして 16 節**「わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、さらに恵みを受けた。」**とあります。ヨハネによる福音書の専門家であるある方は、「**恵みの上に、さらに恵みを受けた。**」という個所を「恵みに代わる恵みをわたしたちは受けた」と直訳しておられます。なぜなら、「受けた」という言葉は、ギリシャ語特有の、歴史の上にただ 1 回起こった出来事を示す時制で書かれているからである、とその理由を述べています。そして実は、先ほど取り上げました 14 節の「**言は肉となって**」の「**なって**」もまた、同じ時制で書かれています。つまり、主イエス・キリストがたった一度歴史の中に「**肉となって**」来られたことは、旧約聖書で語られてきた律法を守ることによって得られる恵みとは異なる全く新しい恵みの到来である、と、著者ヨハネは述べているのだと解説しています。それが 17 節の「**律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理は**

イエス・キリストを通して現れたからである。」の語っている内容であろうと私自身も考えています。そうすると、直前の 16 節に述べられている「**恵み**」が、旧約聖書の律法などに関心の向かない私たちにとっても身近なものとなってきます。

さらに、ヨハネによる福音書 1 章 18 節は次のように真実を語ります。「**いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである**」本当にそうです。だから、私たちは父なる神の独り子、主イエス・キリストを信じて今週一週間も歩んでいくのです。